

青年海外協力隊報告書 バングラデシュ

16年度2次隊 宇野 実喜夫

私は、バングラデシュで青年海外協力隊員のコンピュータ技術者として活動していました。派遣先がバングラデシュと聞いた時、私はバングラデシュについてほとんど知りませんでした。なので、早速バングラデシュの情報をインターネットや図書館で調べてみました。

『人口は約1億3000万人で、日本よりも若干多いが、国の面積は北海道の1.7倍程度しかない。その為、一キロ平方に約800人がひしめく、人だらけの国。』

『国民1人当たりのGDPはわずか445ドルしかない。アジア最貧国。』

『首都ダッカの大気汚染は、全世界トップレベル!』

外務省 HP : <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/index.html>

人口爆発、貧困、大気汚染などといった途上国が抱える悲しい問題を全て備えているがバングラデシュでした。バングラデシュの状況があまりに酷いため、自分が無事活動できるか不安なるよりも、むしろそれを通り越して、どうしてバングラデシュはこんなに酷いのかそればかり考えていたのを覚えています。

私はクルナという町で活動していました。このクルナは、首都ダッカから南西に位置し、マンダローブのシュンドルボン、世界遺産のバゲルハットにも近く、バングラデシュで3番目に大きい都市です。そこで私が活動していたのは、政府が経営するコンピュータスクールです。このスクールでは、初心者を対象にマイクロソフトオフィス（ワード、エクセルなど）を教えています。しかし、それ以外の講座が開かれていませんでした。ここで上級者の為の講座を立ち上げることが私の活動でした。活動当初は、ベンガル語をうまく喋ることが出来ず大変でした。でも、協力的な同僚のお陰で、いくつかのプログラミング講座（VB、C言語など）の準備ができました。

この2年の間、2度赤痢を罹ったり、突然40度の高熱を出したり、病院に連れて行かれて点滴させられたり、8キロやせたり、物が盗まれたり、事故に遭遇したり、雨季には、全てのものにカビが生え、ひどい時には身体にもカビが生えることがありました。でも、今思えばいい思い出です。

バングラデシュで一番うれしかったことがあります



世界遺産バゲルハット



世界遺産シュンドルボンで同僚と

ます。この場所を借りて書かせてください。それは、日本帰国をまじかに控え、インターネット用の電話線の解約をするため、プロバイダーに行った時の話です。突然相手が契約時と違うことを言い出したので、同僚と一緒に連れてもらいました。同僚が相手に会うなり、いきなり、『なんでそんな嘘を言うんだ！ミキ（私のこと）は本当にいい奴なんだ。あなたたちは、パール判事という人を知っているか？知らないだろ！パール判事は第二次世界大戦後の東京裁判中、陪審員の中で



授業風景

唯一日本に対し無罪を主張した人だ！この人はベンガル人（当時はインド人）なんだ。お前ら知らないだろ！日本人はみんな覚えているんだ。ミキも知っているんだ。もう60年も前のことなのに恩に感じているんだ。分かるか。お前ら！金持ちの日本人相手だからそんな嘘を言ってるんだろ！恥ずかしくないのか！』同僚のわけの分からない突然の話に、相手は圧倒され、面食らってました。でも、同僚はお構いなしに話し続けました。私は、



昼食風景

同僚が話しているのを見て、涙が溢れてとまりませんでした。

2年の間自分の力で出来たことなんて本当に大したことなかったと思います。むしろ、私がトラブルに見舞われた時助けてくれたのは、いつも人の良いバングラデシュ人でした。その人たちの助けがなければ無事に生活できなかつたでしょう。どっちがボランティアか分かりません。

日本に帰ってきて約一ヶ月が経ちます。その間、日本でベンガル語を喋る機会が全くありませんでした。これからもバングラの記憶が少し



リキシャ

ずつ薄らいでいくことでしょう。

でも、私を助けてくれたバングラデシュの人々のことはいつまでも忘れません。



同僚と最後の写真